

# Laisser/Faire 使役構文における格付与と Clitic 移動について

Around de l'assignation de Cas et le mouvement des clitics  
dans les constructions causatives introduites par Laisser/Faire \*

石岡 精三  
Seizo ISHIOKA

## 0. はじめに

Kayne (1975) 以来, Laisser/Faire によるフランス語の使役構文に関する論考が多数発表され, 種々の理論が提唱されている。当該 Faire の下位範疇化する要素として CP, あるいは VP (Small Clause) が想定されるのが通例である。<sup>1) 2)</sup> 本稿では, 当該 Laisser/Faire が AgrP を下位範疇化すると前提して初歩的な考察が加えられる。第1節では, 当該使役構文の構造と NP に対する格付与の概略が示される。第2節では, 相異なる対格形と与格形を有する LE, LUI 等のような格標示された代名詞接語 (Case-Marked clitics, CM cl と略記) に対する格付与と束縛理論との関連をが検討され, 第3節は格標示されない代名詞接語 (Non Case-Marked clitics, NCM cl と略記) に対する格付与を検討する。第4節においては, 方言グループの画定と複数の CM cl が共起する事例が検討され, 第5節では, CM cl と NCM cl が共起する用例が検討される。第6節では, WH 要素移動での挙動が考察される。第7節は結語を構成し, いくつかの問題点とそれに対する1つの打開策が示される。

## 1. Faire 使役構文の構造と NP に対する格付与

Faire 使役構文の考察に先だって, 以下の Laisser 使役構文について考える。

- (1) a. je laisserai Jean lire ce livre      b. je laisserai lire ce livre à Jean  
c. je le laisserai lire ce livre      d. je lui laisserai lire ce livre  
'I will let Jean/him read this book'  
e. \*je ferai Jean lire ce livre      f. je ferai lire ce livre à Jean  
g. je lui ferai lire ce livre      'I will make Jean/him read this book'

本稿では, Laisser 使役構文の V (laiss-) が AgrP を下位範疇化すると考える。また, 主語 NP は VP に付加した位置 (Thematic Subject Position) に基底生成され, V の主要部移動に伴い, Case Filter の要請からその構造的な主語位置 (Structural Subject Position (SPEC Agr) あるいは SPEC (T)) へ移動すると考えられる。結果として, (1a) に対して (2) の構造が想定されることになる ( $t_v$  は移動した V の痕跡を表す)。VP に付加した位置に基底生成される主語 NP (Jean) は格を付与されない。Case Filter の要請から, 当該主語 NP (Jean) は格が付与される位置へ移動することになる。embd. T は語彙的要素が付加移動しているため, その sister である VP を L 標示すると考えられる。つまり, 当該 VP は「障壁」(Barrier, bar. と略記) を構成しない。V が T 位置へ付加移動することにより不定法形態の動詞 (lire) が形成される。embd. VP が bar. を構成しないため,

(2) [<sub>V</sub>' [<sub>V</sub>laiss-][<sub>AgrP</sub>[<sub>Agr</sub>' Agr[<sub>TP</sub>[<sub>T</sub>' [<sub>T</sub>lire][<sub>VP</sub>[<sub>VP</sub>[<sub>V</sub>'  $t_v$  NP(ce livre)]]] NP(Jean)]]]]]]

(3) [<sub>V</sub>' [<sub>V</sub>laiss(fai)-][<sub>AgrP</sub>[<sub>TP</sub>[<sub>T</sub>' [<sub>T</sub>lire][<sub>VP</sub>[<sub>VP</sub>[<sub>V</sub>'  $t_v$  NP(ce livre)]]] NP(Jean)]]][<sub>Agr</sub>' Agr  $t_{TP}$ ]]]

主語 NP (Jean) の embd. SPEC (T) への置換移動が可能となるが, 当該位置は格を付与される位置ではない。

matrix V (laiss-) が embd. SPEC (T) 位置にある要素に格 (対格) を付与することもない。Agr が matrix V の統率に対して Relativized Minimality bar. を構成し、この統率関係が許容されないためである。[-Finite] CP (AgrP) 中の Agr は、SPEC-HEAD Agreement によって SPEC (Agr) 位置にある要素に主格を付与することはない。<sup>3)</sup> (1c) 中の CM cl (le) が示すように、主語 NP は matrix V から対格を付与される。つまり、matrix V (laiss-) が embd. SPEC (Agr) 位置にある要素を統率する必要がある。SPEC (T) から SPEC (Agr) への移動を可能にするためには、何らかのプロセスによって embd. TP の bar. 性を相殺する必要が生まれる。そこで、使役構文を導入する V (laiss-) によって統率される Agr はその sister である TP を L 標示すると考える。<sup>4)</sup> 結果として、embd. TP が bar. を構成しないため、主語 NP は基底生成された位置から embd. SPEC (Agr) への NP 移動が可能となる。また、当該 SPEC (Agr) 位置にある主語 NP は、適切に matrix V (laiss-) から対格を付与される。matrix V (laiss-) が embd. T 位置にある不定法形態の動詞を統率しない点に留意されたい。<sup>5)</sup> (1b) はどのように生成されるのであろうか。embd. V の sister 位置にある NP (ce livre) と主語 NP (Jean) の相対的位置に留意されたい。つまり、主語 NP (Jean) が基底生成された位置にとどまっていると考えられる。matrix V (laiss-) と embd. T 位置にある不定法形態の動詞が隣接している。本稿では、この隣接は、最大投射 TP 全体の embd. SPEC (Agr) 位置への移動によって実現されると想定する。結果として、(1b) に対する構造として、上の (3) が想定されることになる。<sup>6)</sup>

(3) の構造は、Faire 使役構文のそれと同じものである (1e) は生成不能)。前述したように、matrix V (laiss-, fai-) に統率される Agr はその sister である TP を L 標示する (TP ≠ bar.)。当該 TP が embd. SPEC (Agr) 位置へ置換移動した場合においても、この TP (≠ bar.) の性質が保存されると想定する。その場合、matrix V (laiss-, fai-) は embd. T 位置にある不定法形態を統率する。この統率関係によって生成された「matrix V + 不定法形態」は一種の複合動詞を形成する (Reed (1990a-b, 1992) と同様に、これを「動詞統率連鎖」(Verbal Government Chain) と呼び、VGCh と略記)。ここで、主語 NP (Jean) が如何なるプロセスによって格を付与されるかが問題となる。(1d, g) の用例が示すように、当該主語 NP は与格を付与される。前述のように、 $t_v$  が基底生成された位置にある主語 NP に格を付与することはない。以下の格付与に関する仮説 (4) によって、matrix V (laiss-, fai-) が単独で当該主語 NP に格を付与することもない。本稿では、VGCh がこの主語 NP に格を付与すると前提する。

(4) 仮説 7)

- a. A VGCh has the Case Array \_\_\_\_\_ Acc (Dat).
- b. Case assignment is optional.
- c. When a verb assigns Case, the entire Case Array must be assigned.
- d. Acc is assigned only under Adjacency.
- e. A VGCh loses its property of assigning Case when the Case in question has already been assigned by an embd.  $t_v$ .
- f. Acc cannot be assigned to an element base-generated as V' 's sister.
- g. Dat cannot be assigned to an element base-generated as V' 's sister.

$t_v$  が NP (ce livre) に対格を付与する場合には問題が惹起する。(4c) と (4e) により、基底生成された位置にある主語 NP (Jean) には如何なる格も付与されない。つまり、Case Filter により、この場合の派生は排除される。一方、VGCh が NP (ce livre) に対格を付与した場合には、主語 NP (Jean) に対する与格付与が可能となる。つまり、(1b, 1f) が適切に派生される。主語 NP が VP に左方付加した位置に生成されると考えた場合には、如何なる状況となるのであろうか。 $t_v$  が NP (ce livre) に対格を付与する場合、VGCh の主語 NP への格付与

が許容されない。t<sub>v</sub> の格付与を空適用した場合、VGCh は主語 NP と t<sub>v</sub> の sister である NP のそれぞれに対格、与格を付与する。この格付与は、(4g) により排除される。格付与に関する上の論法は、以下の (5) の事例をも適切に説明可能である。(5a) の基本構造として以下の (6a) が想定される。(5b) の構造として (6b-c) が想定される ((6c) は主語 NP が VP に左方付加した位置に生成される場合の構造)。

- (5) a. j'ai fait parler Jean 'I made Jean talk'  
 b. j'ai fait téléphoner Jean à Marie 'I made Jean phone to Marie'
- (6) a. [v' [v'fai-]][A<sub>ASP</sub>[TP[T' [Tparler]][VP[V<sub>P</sub>[v' t<sub>v</sub>]]Jean]]][A<sub>ASP</sub>' Agr t<sub>TP</sub>]]]  
 b. [v' [v'fai-]][A<sub>ASP</sub>[TP[T' [Ttéléphoner]][VP[V<sub>P</sub>[v' [v' t<sub>v</sub> Marie]]]Jean]]][A<sub>ASP</sub>' Agr t<sub>TP</sub>]]]  
 c. [v' [v'fai-]][A<sub>ASP</sub>[TP[T' [Ttéléphoner]][VPJean[V<sub>P</sub>[v' [v' t<sub>v</sub> Marie]]]]][A<sub>ASP</sub>' Agr t<sub>TP</sub>]]]
- (7) \*j'ai fait téléphoner Marie à Jean 'I made Jean phone to Marie'

(6a) の構造から明かなように、(5a) における主語 NP (Jean) の生成位置は問題とならない。VP に右方付加、あるいは左方付加した場合の双方において、当該主語 NP は VGCh から対格を付与される。(5b) は、若干問題を提起するように思われる。(6c) の構造は、(5b) を適切に生成する。それは、VGCh が主語 NP (Jean) と V' の sister NP (Marie) のそれぞれに対格、与格を付与するためである。一方、(6b) の構造は (7) を派生させることになる。本稿の仮説 (4f) は、V' の sister 位置にある NP (Marie) に対する対格付与を排除する。それでは、(6b) の構造から (5b) が生成不可能だと考えるべきであろうか。Goodall (1987) では、NP (Marie) が embd.VP あるいはその上位にある最大範疇へ付加移動すると想定される。この移動により、VGCh と主語 NP (Jean) が隣接し、当該主語 NP に対格が付与可能となる。同時に、VGCh は NP (Marie) に与格を付与する。本稿では、この場合の付加移動が NP (あるいは PP) に限定されると考える (この点に関しては、CM cl に対する格付与の箇所でも再述する)。つまり、(5b) は (6b) と (6c) の双方の構造から派生可能と考える。

次に、以下の (8) の用例を検討する。(8a) の基本構造として、(9a-b) が想定される (PP (dans la gare) の表示は省略)。

- (8) a. \*je laisserai donner un livre à Paul à Jean dans la gare (Quicoli 1980: 38c, b)  
 b. je laisserai donner ce livre à Paul par Jean 'I will let Jean give this/a book to Paul...'
- (9) a. [v' [v'laiss-]][A<sub>ASP</sub>[TP[T' [Tdonner]][VPJean[V<sub>P</sub>[v' [v' t<sub>v</sub> un livre] Paul]]]]][A<sub>ASP</sub>' Agr t<sub>TP</sub>]]]  
 b. [v' [v'laiss-]][A<sub>ASP</sub>[TP[T' [Tdonner]][VP[V<sub>P</sub>[v' [v' t<sub>v</sub> un livre] Marie]]]Jean]]][A<sub>ASP</sub>' Agr t<sub>TP</sub>]]]  
 c. [v' [v'laiss-]][A<sub>ASP</sub>[TP[T' [Tdonner]][VP[V<sub>P</sub>[v' [v' t<sub>v</sub> un livre] Marie]]]Φ]]][A<sub>ASP</sub>' Agr t<sub>TP</sub>]]]

以下の理由により、主語 NP (Jean) が基底生成される位置に関係なく (8a) は非文と予測される (Case Filter に抵触する)。V (donner) は VGCh と同様の Case Array を持つと考えられる。つまり、対格を付与した場合には、与格の付与も可能である。動詞痕跡 (t<sub>v</sub>) が NP (un livre, Paul) のそれぞれに対格、与格を付与した場合には、VGCh による格付与は許容されない (仮説 (4e))。結果として、主語 NP (Jean) には如何なる格も付与されない。t<sub>v</sub> が NP (un livre) に対格を付与し、与格付与を空適用した場合には、主語 NP (Jean) と NP (Paul) に格が付与されない。更に、(9a) における t<sub>v</sub> の格付与を空適用した場合には、主語 NP に対格が付与され、NP (un livre, Paul) の一方のみに与格が付与される。(9b) における t<sub>v</sub> の格付与を空適用した場合には、NP (un livre) に対格が付与され、NP (Paul) と主語 NP (Jean) の一方のみに与格が付与されることになる。つまり、(9a-b) の構造からの派生はすべて Case Filter の要請を満たさないため、適切な出力が得られないことになる (NP (Paul) が上位にある最大範疇に付加移動した場合でも同様である)。これにより、(8a) の非文性が説明される。(8b) はどのように説明されるであろうか。(8b) の基本構造として上の (9c) が想定される。この場合、主語 NP (Jean) が D 構造において PP (par Jean) で実現されている点に留意されたい。つまり、主

語 NP が基底生成される位置が空であり、 $t_v$  (embd.V) は当該主語位置に $\theta$ 役を付与しないと考えられる（本稿では、PP (par Jean) がどの最大範疇に付加した位置に基底生成されるかは問わない）。Burzio's Generalization (10) により、 $t_v$  (embd.V) は構造格（対格）を付与することはない（この場合、与格付与も排除される）。つまり、この場合の  $t_v$  (embd.V) は、後述する能格動詞 (Ergative Verbs) と同様の挙動をとると考えられる。

(10) Burzio's Generalization: A verb that assigns a structural Case to its object assigns a  $\theta$ -role to its subject and vice versa.

主語位置が空であるため、当該位置への格付与が不要となる。つまり、VGCh が NP (ce livre, Paul) のそれぞれに対格、与格を付与することが可能となる。結果として、(8b) は適切に文法的と予測される。

## 2. CM cl の挙動

第2節では、以下の (11) 等の用例を説明すると考えられる仮説が設定される。基本的に、CM cl は NP と同様の位置に生成され、それが基底生成された位置において Case Filter の適用を受けると前提する。<sup>8)</sup>

- (11) a. Jean a laissé Marie l' écrire (Ouhalla 1989: 67c)    b. \*Jean l' a laissé Marie écrire  
 c. Jean l' a laissé écrire à Marie (Ouhalla 1989: 67a)  
 d. \*Jean l' a laissé (à) Marie écrire (Ouhalla 1989: 67b)  
 e. \*Jean a laissé l' écrire à Marie 'Jean let Marie write it'

- (12) a. [<sub>v</sub> [<sub>v</sub>laiss-][<sub>Agr</sub>Marie [<sub>Agr</sub> Agr[<sub>TP</sub>[<sub>T</sub>' [<sub>T</sub>écrire]][<sub>VP</sub>[<sub>VP</sub>[<sub>v</sub>'  $t_v$  le]]]  $t_{Marie}$ ]]]]]]  
 b. [<sub>v</sub>' [<sub>v</sub>laiss(fai)-][<sub>Agr</sub>[<sub>TP</sub>[<sub>T</sub>' [<sub>T</sub>écrire]][<sub>VP</sub>[<sub>VP</sub>[<sub>v</sub>' [<sub>v</sub>'  $t_v$  le] Marie]]]Jean]]][<sub>Agr</sub>' Agr  $t_{TP}$ ]]

VGCh が形成されない (11a-b) の基本構造として、(12a) が想定される。embd.V がその sister 位置に生成される CM cl (le) に対格を付与し、matrix V (laiss-) が主語 (Marie) に対格を付与する (Case Filter が満たされる)。 (11a) の CM cl (le) の接語化 (Cliticization, CL と略記) は embd.Agr への付加移動により、(11b) のそれは matrix Agr の複合体への付加によって発動すると考えられる。一方、(11c, e) では VGCh が形成される。(12b) が (11c, e) の基本構造となる。当該例においては、cl (le) の matrix Agr 複合体への CL が義務的に発動する。この CL に関する相違はどのように説明されるか。本稿では、CM cl の痕跡が  $X^0$  束縛される、つまり、CM cl の痕跡が束縛原理 (A) に従うと前提して論を進める。その定義体系を以下の (13-17) に示す。前述のように、CM cl は基本的に NP と同様の位置に基底生成される。また、cl の移動 (CL) は痕跡でない  $X^0$  範疇への付加移動によって発動すると前提される (cf. Kayne (1989, 1990, 1991))。cl の  $X^0$  範疇への付加移動において、主要部移動規制 (Head Movement Constraint), より広範には Relativized Minimality が発動しないと考える (cf. Kayne (1989))。つまり、cl は基底生成された位置 (あるいは、適切に格を付与される位置) から一挙にその最終着地点へ移動する。また、CM cl の痕跡は束縛原理 (A) と空範疇原理 (ECP) (先行詞統率) に従う。更に、CM cl 移動は、その統率範疇内において可能な限り上位の  $X^0$  範疇への移動を要請する代名詞接語移動規制 (Clitic Placement Constraint, CPC と略記) に従うと考える (cf. Ouhalla (1989))。

- (13) Binding Principle A ( $X^0$  Binding) :

The trace of a CM cl is bound in its governing category (GC).

- (14) The Definition of  $X^0$  Binding:

YP is bound by  $X^0$  iff YP and  $X^0$  are coindexed and  $X^0$  c-commands YP.  
 (c-command being defined with respect to a branching node  $X'$ )

- (15) The Definition of Governing Category (GC):

$\beta$  is a governing category for  $\alpha$  iff  $\beta$  is the minimal maximal projection containing  $\alpha$ , a canonical governor of  $\alpha$ , and a SUBJECT accessible to  $\alpha$ . (cf. Aoun 1985)

(16) The Definition of SUBJECT:

The SUBJECT consists of Agr which is Case-assignable by SPEC-HEAD Agreement or of a Case-assigned subject (NP and (CM) cl including its trace in the latter case) which is base-generated at a left VP-adjoined position or has moved from its base-generated (right or left VP-adjoined) position to a SPEC position to avoid Case Filter violations.

(17) The Definition of Clitic Placement Constraint (CPC):

Clitics must attach/move to the highest (functional) element in their construction, (general principles of UG(i.e. ECP) allowing) (cf. Ouhalla 1989: 24).

大主語 (SUBJECT) として, [+Finite] CP 中の Agr, VP に左方付加した位置に基底生成される主語 NP と CM cl (後者の場合は, その痕跡も含まれる), 更に VP に右方付加した位置に基底生成され, Case Filter の要請から SPEC 位置へ移動している主語 NP と CM cl (後者の場合に, その痕跡も含まれる) が想定される。<sup>9)</sup> 統率範疇の画定に重要な役割を果たすのは, cl の痕跡を規範統率する要素, つまり当該痕跡の左方位置にある統率要素である。この前提の下で, (11) の用例を検討する。(11a-b) の cl (le) に対して GC を構成する最大範疇は, embd. AgrP である。当該 cl の痕跡を規範統率する要素が embd. *tv* であり, 接近可能な大主語となるのは embd. SPEC (Agr) 位置へ移動した主語 NP (Marie) である。CPC の適用によって, 当該 cl (le) は embd. Agr 位置へ一挙に移動することになる。結果として, (11a-b) の相違が説明されることになる。<sup>10)</sup>

(11c, e) の cl (le) に対して GC を構成するのは matrix AgrP である。大主語として matrix Agr, あるいは matrix SPEC (Agr) 位置へ移動した主語 NP (Jean) が指定されるためである (embd. AgrP 中の主語が VP に右方付加した位置に生成される場合)。つまり, cl (le) の matrix Agr 位置への移動が義務的に発動する。結果として, (11c) が文法的, (11e) が非文と予測される。embd. AgrP 中の主語 NP (Marie) が VP に左方付加した位置に生成される場合はどうであろうか。その場合, 当該 cl 痕跡に対して GC を構成するのは embd. VP となる。CPC は, 当該 cl (le) の *tv* 位置への移動を要請するが, これは許容されない (移動より生成した X<sup>0</sup> 範疇痕跡への付加移動は排除される)。同時に, この派生では, cl に与格が付与される。(11d) は問題を惹起するように思われる。(11d) の基本構造が (12a) の場合には, 当該例が束縛原理 (A) により排除される。一方, (11d) が (12b) を基本構造とする場合には問題が起こる。cl (le) と主語 NP (Marie) のそれぞれに対格, 与格が付与され, 束縛原理 (A) と CPC の要請が満たされる。(11d) の S 構造は与格を付与された主語 NP (à Marie) が embd. SPEC (T) 位置へ移動することにより生成されたと考えられる。しかし, この移動は許容されないと思われる。この移動は, WH 移動と NP 移動のどちらでもない。また, この移動は本稿で設定される随伴 (Pied-Piping) に対する以下の (18) の仮説によっても説明されるであろう。

(18) 仮説:<sup>11)</sup>

In the following configuration [<sub>XP</sub>... [<sub>X</sub> [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub>... ]]]] created by movement of an XP and a pied-piped YP by the movement of the XP,

- (a) any element cannot NP-move beyond the maximal node(XP),
- (b) no NP can NP-move beyond the maximal node(YP), and
- (c) a clitic cannot NP-move beyond the whole maximal node(YP).

標準フランス語以外の方言の用例の箇所では略述するように, Faire 使役構文における embd. AgrP 中の主語である CM cl が Case Filter の要請から embd. SPEC (T) 位置へ移動すると考えられる。この移動は仮説 (18) に抵触するものでない。次に, 主語である CM cl が付加移動する事例を検討する。

(19) a. Jean lui a fait manger le gâteau (Goodall 1987: 18a)

b. \*Jean a fait lui manger le gâteau (Goodall 1987: 18b) 'Jean made him eat the cake'

- (20) a. Jean l'a fait rire (Goodall 1987: 20a)  
 b. \*Jean a fait le rire (Goodall 1987: 20b) 'Jean made him laugh'

(19-20)において、Case Filter の要請は満たされる。cl (lui, le) の痕跡に対して GC となるのは matrix AgrP である。つまり、当該主語 cl (lui, le) は matrix Agr 位置へ付加移動することになる。結果として、(19-20)の相違が説明可能となる。次に、与格 CM cl が移動する用例を検討する。

- (21) a. \*Jean lui a fait écrire l'enfant (Goodall 1987: 21a)  
 b. \*Jean a fait lui écrire l'enfant (Goodall 1987: 21b) 'Jean made the child write to him/her'
- (22) a. Jean lui a fait écrire (par l'enfant) (Goodall 1987: 22a)  
 b. Jean a fait lui écrire (par l'enfant) (Goodall 1987: 22b)  
 'Jean made someone(the child) write to him/her'
- (22') a. je leur ai fait téléphoner (par le secrétariat)  
 b. \*j' ai fait leur téléphoner (par le secrétariat)  
 'I made the secretariat phone to them' (Pijnenburg & Hulk (P&H) 1989: 20)
- (23) a. Jean l'a fait manger (par l'enfant) (Goodall 1987: 25a)  
 b. \*Jean a fait le manger (par l'enfant) (Goodall 1987: 25b)  
 'Jean made it eaten (by the child)'
- (24) a. \*Jean lui a fait envoyer un paquet au facteur (Roegiest 1991: 1c)  
 b. Jean lui a fait envoyer un paquet par le facteur (Roegiest 1991: 1d)  
 'Jean made the maker send a packet to him/her'

(21) は、(5b) に類似するであろう。(21)において与格を付与される要素が NP でなく CM cl である点が異なる( (5b)に関連して、その基本構造(6b-c)に留意されたい)。CM cl の移動が基本的に GC 内にある最上位にある X<sup>0</sup> 範疇への付加移動である点に留意されたい。つまり、NP (あるいは PP) の場合と異なり、CM cl の最大範疇への付加移動が排除される。主語 NP が VP に左方付加した位置に生成される構造、つまり(6c)に対応する構造から派生する場合を検討する。VGCh が NP (l'enfant) と cl (lui) のそれぞれに対格、与格を付与する。cl (lui) に対して GC を構成するのは embd.VP である。しかし、移動によって痕跡となった X<sup>0</sup> 範疇 (tv) への CL が排除されるため、この派生は許容されない。主語 NP (l'enfant) が VP に右方付加した位置に生成される場合、つまり(6b)に対応する構造から派生する場合はどうであろうか。V' の sister 位置に NP が生成される場合と異なり、当該位置に CM cl が生起する場合には、当該 cl の最大範疇への付加移動が許容されない(VP に付加した位置に生成される主語 CM cl が Case Filter の要請から embd.SPEC (T) 位置へ移動することを許容する方言がある)。仮説(18)により、V' の sister 位置に生成される cl が embd.SPEC (T) 位置へ移動することはない。結果として、主語 NP (l'enfant) と cl (lui) はそれが基底生成された位置でそれぞれ与格、対格を付与される。しかし、この派生は V' の sister 位置に対する対格を許容しない仮説(4g)によって排除される。つまり、(21)の双方が非文と予測されることになる。(22)の用例では、embd.AgrP 中の主語位置が空(Φ)であると考えられる。(10)のBurzio's Generalizationにより、tv (embd.V)の構造格(対格)付与が阻止される。tv (embd.V (écri-))の与格付与機能が保存されると前提する。(22)ではVGChが形成されるが、格を付与することはない。当該 cl (lui) に対して GC となるのは matrix AgrP である。つまり、本稿の仮説群は(22a)を適切に文法的と予測する。しかし、CPCの適用により、(22b)は非文と予測されることになる。<sup>12)</sup> (22)の用例は(23)と比較すべきものである。(22)と異なり(23)では、cl (le) に対格を付与するのはVGChである。つまり、VGChが形成され、同時にCM clに格を付与する場合には、CPCが厳密に適用される。(22)と(23)の相違を説明する仮説として、(25)を設定する。

(25) 仮説: <sup>13)</sup>

In some dialects, a clitic need not be subject to CPC when a Verbal Government Chain (VGCh) is formed and assigns no Case.

次に、(24)を検討する。(24a)は本稿の(8a)と同様に、Case Filterによって排除される。(24b)において、*embd. AgrP*の主語が生成される位置は空( $\Phi$ )であり、*t<sub>v</sub>* (*embd. V*)はその *sister* 位置にある NP (*un paquet*)に構造格(対格)を付与しない。当該 NP に対格を付与する要素は VGCh である。CM cl (*lui*)も同様に、VGCh から与格を付与される。当該 cl に対して GC を構成するのは *matrix AgrP* である。CPC の適用により、CM cl (*lui*)の *matrix Agr* への CL が義務的に発動する。

### 3. NCM cl の挙動

NCM cl は、1・2人称 cl と3人称再帰 cl (*se*)を含む。(26)が示すように、NCM cl がCM cl は異なる挙動をとる。CM cl と NCM cl が同じ挙動をとると考えた場合、(26a, 26c)は NP (*les enfants*)に関する Case Filter により排除される。(26b)は cl (*se*)に関する束縛理論と CPC によって排除される。しかしながら、(26d)を排除する要因は見当たらないと思われる。(26)の用例を説明する仮説として、(27)を設定する。

- (26) a. Jean fait se<sub>i</sub> laver les enfants<sub>i</sub> (Wehrli 1986: 15a-d)  
b. \*Jean fait se<sub>i</sub> laver aux enfants<sub>i</sub>      c. \*Jean se<sub>i</sub> fait laver les enfants<sub>i</sub>  
d. \*Jean se<sub>i</sub> fait laver aux enfants      'Jean makes the children wash themselves'

(27) 仮説:

- a. A NCM cl is generally base-generated at the same position as a CM cl and is subject to Case Filter. <sup>14)</sup>  
b. A NCM cl satisfies the Case Filter requirements by being base-generated at a left-adjoined position of a Case-assignable X<sup>0</sup> category or adjoining to a Case-assignable X<sup>0</sup> category, ECP allowing.  
c. On condition that a NCM cl cannot satisfy the Case Filter requirements (b) and the base-generated position of a subject in an *embd. AgrP* is empty, or that it is generated at a subject position in an *embd. AgrP*, it behaves as a CM cl.

- (28) [<sub>V</sub>' [<sub>V</sub>fai-][<sub>AGR</sub>P [<sub>TP</sub> [<sub>T</sub>' [<sub>T</sub>se laver][<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub>' t<sub>SE-V</sub> t<sub>SE</sub>]]] les enfants]]][<sub>AGR</sub>' Agr t<sub>TP</sub>]]]

仮説(27)の下で、(26)は(28)の基本構造を持つ。NCM cl (*se*)は、*embd. V*へ左方付加移動することにより Case Filter の要請を満たす(この場合、cl (*se*)に対格が付与される)。一方、VGCh は基底生成された位置にある主語 NP (*les enfants*)に対格を付与する。<sup>15)</sup>よって、主語 NP に関する Case Filter の要請が満たされる。この場合、VGCh が主語 NP に与格を(位置)格付与することはない。これにより、(26b, d)が排除される。X<sup>0</sup> 範疇へ付加移動した要素には、当該 X<sup>0</sup> 範疇外部への更なる主要部(付加)移動が許容されないと考えられる(cf. Roberts (1991))。つまり、この場合の NCM cl (*se*)は不定法形態の動詞に左方付加した位置にとどまることになる。これにより、(26c-d)が非文と予測されることになる。結果として、本稿の仮説は(26a)のみを文法的と予測する。(26)を説明する論法は以下の(29)を適切に説明する。次に、(30)を検討する。

- (29) a. Marie a fait s<sub>i</sub>' acheter un livre à Jean<sub>i</sub> (Rouveret and Vergnaud 1980 (R&V) :note 51)  
'Marie had Jean buy himself a book'  
b. Marie a fait se<sub>i</sub> téléphoner ses parents<sub>i</sub> (R&V 1980:note 51)  
'Marie made his parents phone to each other'

(30a, c, d)は、仮説(27)によって説明可能である。但し、(30b)の判断(?)は説明不能(本稿の仮説群は当該例を文法的と予測する)。問題となるのは(30e)である((31)はその構造)。





する必要が生まれる。これまで検討したように、ある一部の例外を除き標準フランス語での VGCh の形成は義務的に発動した (Case Filter の要請)。標準フランス語と異なり、当該 VGCh の形成が随意的と考えられる方言が存在する。<sup>17)</sup>ここでは、以下のように考えることにする。標準フランス語以外の方言は、matrix V (fai-) が CM cl に対して VGCh と同様の Case Array (\_\_\_\_\_ Acc (Dat)) を持つグループ (A 方言) と Case Array (\_\_\_\_\_ Dat) を持つグループ (B 方言) に大別される。Authier & Reed (1991) の用例 (35a-b) は後者の B 方言グループに属すと考えられる。Tasmowski (1984) の用例 (35c) は A 方言グループのそれであろう。標準フランス語では、(35b) のみが生成される。B 方言グループでは、VGCh が形成された場合に生成される (35b) に加えて (35a) の派生も可能である。A 方言グループは興味ある挙動を示す。VGCh による格付与が発動する場合には (35b) も生成される。一方、VGCh が形成されない時には、(35c) の embd.V (tv) がその sister 位置にある NP (Marie) に対格を付与し、matrix V (fai-) が主語 cl (le) に対格を付与する。embd.VP に右方付加した位置に生成される主語 cl (le) に対する対格付与は排除される。また、当該 cl (le) が embd.VP に左方付加した位置に生成される場合にも matrix V (fai-) が基底生成された位置にある当該 cl (le) に対する対格付与 (= 統率) が許容されない。それは、embd.T の介在によって matrix V (fai-) の cl (le) に対する統率が排除されるためである (Relativized Minimality)。<sup>18)</sup>ここで、主語 CM cl (le) に対する対格付与は当該 cl が embd.SPEC (T) 位置に NP 移動した時点で適用されると前提する。この NP 移動により、対格付与に対する隣接条件が満たされる (cl と異なり NP の場合には、当該 NP 移動が許容されないと考えられる)。また、この cl の NP 移動は随伴に関する規制 (18) に抵触しない。<sup>19)</sup>能格動詞に対する主語は当該動詞の sister 位置に生成される。また、能格動詞はその sister 位置に生成される主語に対格を付与することはない。(34) の基本構造として以下の (36) が想定される (PP (à Jean) の表示は省略)。VGCh が形成された場合、当該 Chain は基底生成された位置にある主語 CM cl に対格を付与可能である。また、この cl (la) に対して統率範疇 (GC) を構成するのは matrix AgrP である。結果として、当該 cl (la) の matrix Agr 位置への CL が義務的に発動する。また、V の sister 位置に生成される要素に対する与格付与が許容されないとする仮説 (4g) が妥当するならば、(34a-b) の対比は標準フランス語のみならず、A, B 方言にも観察されることになる (V の sister 位置に生成された cl が embd.SPEC (T) 位置へ移動することはない (cf. (18))。次に、本節において検討される用例 (37-38) を示す。

- (37) a. je la lui ai fait quitter <sup>20)</sup> (Reed 1990b: 20) 'I made him leave it'  
 b. elle me lui fera téléphoner (Quicoli 1984: 3d) 'she will make me phone to her'  
 c. ça le faisait lui téléphoner tous les matins (Tasmowski 1984: 404)  
 'this made him phone to her every morning'  
 d. c'est son entraîneur qui l'a fait l'abandonner (Reed 1990b: 23c)  
 'it is his trainer who made him give it up'

- (38) a. on lui fera envoyer le paquet à Paul (Tasmowski 1984: 418)  
 'we will make him send the package to Paul'  
 b. \*on lui fera envoyer le paquet à Paul (同上) 'we will make Paul send the package to him'

(37a) の CM cl (la, lui) はそれぞれ、embd.AgrP 中にある V の sister 位置と主語位置に生成される。主語 cl (lui) が VP に右方付加した位置に生成される場合、cl (la, lui) のそれぞれに対格、与格を付与する要素は VGCh である。また、両 cl (la, lui) に対して GC を構成するのは matrix AgrP である。つまり、cl (la, lui) の matrix Agr への CL が義務的に発動するため、(37a) の文法性が適切に予測される (この場合、標準フランス語、A 方言と B 方言のすべてにおいて (37a) は文法的と予測される)。主語 cl が VP に左方付加した

位置に生成される場合はどうであろうか。標準フランス語では、VGCh が主語 *cl* と *embd.V (tv)* の *sister* 位置にある *cl* のそれぞれに対格、与格を付与する。この格付与は本稿の (4g) に違反する (生成不能)。A 方言では、*matrix V (fai-)* が基底生成された位置から *embd.SPEC (T)* 位置へ移動した主語 *cl* に対格を付与し、*embd.tv* がその *sister* 位置にある *cl* に対格を付与する (Case Filter が満たされる)。対格主語 *cl* に対して GC となるのは *matrix AgrP* である。*tv* から対格を付与される *cl* に対して GC を構成するのは *embd.TP* となる。結果として、A 方言グループにおいて、*tv* の *sister* 位置に生成される *cl (la)* の *matrix Agr* への CL は排除される。後述するように、主語 *cl (le)* の生成位置に関わらず、(37d) のタイプが生成される。B 方言グループにおいて、主語 *cl (lui)* が VP に左方付加した位置に生成される場合には、*cl (la)* に対する GC は *embd.VP* となる。この場合の派生は許容されない (移動によって痕跡となった  $X^0$  範疇への CL は排除される<sup>21)</sup>)。主語 *cl (lui)* が VP に右方付加した位置に生成される場合には、両 *cl (lui, la)* に対して GC を形成するのは *matrix AgrP* である。結果として、B 方言グループでは、(37a) に対して 2つの生成プロセスが存在することになる。(37b) は、標準フランス語では非文と予測される。VP に右方付加した位置に生成される主語 *cl (me)* に対して与格付与は可能である。その場合、VGCh は *embd.V'* の *sister* 位置に生成される *cl (lui)* に対格を付与する (これは、仮説 (4f) に反する)。主語 *cl (me)* が VP に左方付加した位置に生成される場合は、主語 *cl* に対格が付与される (*cl (lui)* に与格が付与される)。しかし、*cl (lui)* の GC を構成するのは *embd.VP* である。前述のように、この派生は許容されない (非文)。A 方言グループにおいて、(37b) は生成されるであろうか。主語 *cl (me)* の生成位置に関わらず、当該主語 *cl (me)* は *embd.SPEC (T)* 位置へ移動して対格を付与される (*embd.SPEC (T)* 位置に移動した主語 *cl* は大主語として機能する)。*cl (lui)* の GC となるのは *embd.TP* である。よって、*cl (lui)* の *matrix Agr* への CL は排除される。つまり、A 方言グループにおける (37b) の生成は許容されない (非文) (A 方言グループでは、(37c) のタイプが生成される)。

B 方言グループにおいてはどうかであろうか。(37b) の *tv (embd.V)* と *matrix V (fai-)* が *cl (lui, me)* のそれぞれに与格を付与する。<sup>22)</sup> 主語 *cl (me)* が VP に左方付加した位置に生成されると考えた場合、*cl (lui)* に対して GC を構成する要素は *embd.VP* となる。<sup>23)</sup> 前述のように、この場合の派生は不可能である。しかしながら、B 方言グループでは適切な派生が考えられる。それは、主語 *cl (me)* が VP に右方付加した位置に生成される場合の派生である。その場合、*cl (me, lui)* に対して GC となるのは *matrix AgrP* である。結果として、*cl (me, lui)* の *matrix Agr* への CL が義務的に発動する。(37c) の用例は方言グループ A に属すものである。明らかに、標準フランス語 (SF) と B 方言における当該文生成は不可能である。VGCh による格付与発動する場合には、主語 *cl (le)* が VP に左方付加した位置に生成される必要がある (Case Filter)。*embd.V'* の *sister* 位置に生成される *cl (lui)* に対して GC となるのは *embd.VP* である。結果として、この派生からは適切な出力が得られない。B 方言においては、主語 *cl (le)* に対格を付与できない。以下に示すように、A 方言グループでの当該用例の生成は可能である。(37c) の主語 *cl (le)* は基底生成される位置に関係なく、*embd.SPEC (T)* 位置に移動することにより *matrix V (fai-)* から対格を付与される。*tv (embd.V)* が *cl (lui)* に与格を付与する。主語 *cl* に対して GC を構成する要素となるのは *matrix AgrP* である。つまり、*cl (le)* は *matrix Agr* 位置へ付加移動することになる。一方、*embd.SPEC (T)* に移動した *cl (le)* (あるいは、その痕跡) が *cl (lui)* に対する大主語 (SUBJECT) として機能するため、与格 *cl (lui)* に対して GC を構成するのは *embd.TP* である。束縛原理 (A) と CPC の適用により、*cl (lui)* は不定法形態の動詞が生成される T 位置へ付加移動する。これにより、A 方言における (37c) が適切に生成される。<sup>24)</sup> (37c) と同様に、(37d) は A 方言においてのみ生成

可能である。(38a)は、B方言において文法的と予測される。他の標準フランス語(SF)とA方言グループでは、Case Filterと主語cl(lui)への与格付与の排除により非文と予測される。(38b)はすべての方言で非文と予測される(matrix V(fai-)が主語NPに格を付与することはない)。次に、Milner(1982)の用例を検討する。

- (39) a. je la fera lui parler (Milner 1982: 353) 'I will make her speak to him'  
 b. je la fera le lire (Milner 1982: 353) 'I will make her read it'
- (40) a. \*je la lui ferai parler (Milner 1982: 353) 'I will make her speak to him'  
 b. \*je la le ferai lire (Milner 1982: 353) 'I will make her read it'  
 c. \*je lui ferai le lire (Milner 1982: 353) 'I will make her read it'  
 d. je le lui fera lire (Milner 1982: 353) 'I will make her read it'  
 e. \*je le ferai lire Paul (Milner 1982: 354) 'I will make Paul read it'

(39)と(40a-b)の用例は方言グループAに属する。(39a-b)と(40a-b)中でV、あるいはV'のsister位置に生成されるcl(lui, le)に対してGCを構成するのはembd.TPである(主語cl(la)はembd.SPEC(T)位置へ移動し、大主語として機能する)。主語cl(la)のGCはmatrix AgrPである。結果として、(39a-b)と(40a-b)の相違が説明される。(40c)と(40d)の相違は、VGChによる格付与が発動した場合に適切に説明される。VGChがembd.Vのsister位置にあるcl(le)とVPに右方付加した位置に生成される主語cl(lui)のそれぞれに対格、与格を付与する。両clに対してGCとなるのはmatrix AgrPである(B方言では、VGChが形成されない場合でも同様の相違が観察される)。つまり、(40c)と(40d)の相違はすべての方言グループにおいて観察されることになる。(40e)は、すべての方言グループで非文と予測される。Milner(1972: 353)は、対格・与格である非主語clがembd.T位置へ付加移動する場合には与格である主語clのmatrix AgrへのCLが許容されないと言う((39)が示すように、対格主語clの当該位置へのCLは許容される)。

- (41) a. \*je lui ferai le lire (Milner 1982: 353) 'I will make her read it'  
 b. \*je lui ferai lui donner une pomme (同上: 353) 'I will make her give an apple to him'

(39)が文法的となるのは方言グループAの場合である。当該グループにおいて、matrix V(fai-)がembd. AgrP中の主語clに付与可能な格は対格である。(41)において主語clに付与される格は与格(lui)である。よって、(41)がAグループにおいて生成されることはない。本稿の仮説群は、SFとB方言の用例としての(41)を非文と予測する。また、Milner(1982: 354)は、(42a-b)の相違を示す方言の存在を指摘する。

- (42) a. je lui ai fait parler Paul (Milner 1982: 354) 'I made Paul speak to her'  
 b. \*je le lui ai fait parler (Milner 1982: 354) 'I made him speak to her'  
 (c. je l' ai fait lui parler 'I made him speak to her')

(42a)中の主語NP(Paul)とcl(lui)は、それぞれVPに左方付加した位置とV'のsister位置に生成される。当該生成位置において、VGChは主語NPとclのそれぞれに対格、与格を付与する( $t_v$ がclに与格を付与する可能性もある)。VPに左方付加した位置に生成されたNPは大主語として機能するため、embd.VPがcl(lui)に対するGCとなる。前述したように、この場合には適切な派生が得られない。つまり、(42a)は本稿で設定されたすべての方言グループにおいて非文と予測されることになる。与格cl(lui)がmatrix Agr位置へ付加移動するためには、当該clに対するGCがmatrix AgrPとなる必要がある。そこで、VPに左方付加した位置でなく、右方付加した位置に生成されるNPが大主語として機能する方言グループを想定することにする(主語clに対しては、大主語定義(16)が適用される)。

(43) 仮説:

French has a dialect group in which the SUBJECT doesn't consist of a left VP-adjoined subject NP but of a right VP-adjoined one.

前述のように、(42a)の主語 NP (Paul) は VP に右方付加した位置に生成されることはない (Case Filter に違反する)。当該方言において、VP に左方付加した位置に生成される当該主語 NP が大主語と構成することはない。よって、cl (lui) の GC となるのは matrix AgrP である。結果として、(42a)の文法性が説明される。主語が cl (le) である (42b) の用例を検討する。VGCh が両 cl に格を付与し、仮説 (43) が主語 NP だけでなく主語 cl にも適用されると考えた場合には、(42b) が文法的と予測される (よって、仮説 (43) は主語 NP に対して適用される)。この場合、主語 cl (le) は VP に左方付加した位置に生成される。問題となっている方言では、主語 NP の場合と異なり、VP に左方付加した主語 cl が大主語として機能する。結果として、cl (lui) に対して GC となるのは embd.VP である (この場合は適切な出力が得られない)。A 方言グループの用例としての (42b) は、(37c) を説明する論法によって非文と予測される。主語 cl (le) が対格を付与されているため、B 方言グループの用例としての (42b) も生成不能 (非文) である。ここで、(42a-b) の相違を示す方言が本稿で設定されたどの方言グループの下位区分であるかが問題となる。(42a-b) の用例のみでは判断不能であるが、本稿では当該方言を A グループの下位区分と考えることにする (A' 方言グループと呼ぶ)。(42) の用例が A' グループのそれであるとすれば、cl (lui) に対して GC を構成するのは embd.TP となる。結果として、(42b) は束縛原理 (A) に抵触する (非文)。また、当該方言では (42c) が文法的と予測されることになる (cf. (39a))。結果として、以下の方言別分布 (44) が考えられることになる。

(44) 方言別分布:	(37a)	(37b)	(37c)	(37d)	(38a)	(38b)	(39a)	(39b)		
SF	ok	*	*	*	*	*	*	*		
A 方言	ok	*	ok	ok	*	*	ok	ok		
A' 方言	ok	*	ok	ok	*	*	ok	ok		
B 方言	ok	ok	*	*	ok	*	*	*		
	(40a)	(40b)	(40c)	(40d)	(40e)	(41a)	(41b)	(42a)	(42b)	(42c)
SF	*	*	*	ok	*	*	*	*	*	*
A 方言	*	*	*	ok	*	*	*	*	*	ok
A' 方言	*	*	*	ok	*	*	ok	*	*	ok
B 方言	*	*	*	ok	*	*	*	*	*	*

5. CM cl と NCM cl が共起する場合

- (45) a. je l<sub>i</sub> 'ai fait se<sub>i</sub> laver (Hyman & Zimmer 1976: 46) 'I made him wash himself'  
 b. je lui<sub>i</sub> ai fait se<sub>i</sub> laver la figure (同上: 47) 'I made him wash his (own) face'  
 c. ?Marie a fait se<sub>i</sub> les acheter Jean<sub>i</sub> (R&V 1980: 196b-d)  
 d. \*Marie les a fait s<sub>i</sub> acheter à Jean<sub>i</sub>  
 e. \*Marie les a fait s<sub>i</sub> acheter Jean<sub>i</sub> 'Marie had Jean buy them for himself'

(46) [V' [v'fai-][L<sub>AGR</sub>P [T<sub>P</sub> [T' [T<sub>donner</sub>][V<sub>P</sub>[V<sub>P</sub>[v' [v' t<sub>SE-V</sub> les] t<sub>SE</sub>]]]Jean<sub>i</sub>]]][L<sub>AGR</sub>' Agr t<sub>TP</sub>]]]

(45a) は問題なく生成される。NCM cl (se) は embd.V へ左方付加し、当該 embd.V と共に embd.T 位置へ移動して不定法形態を形成してその移動を停止する (PF において、この不定法形態の動詞は、matrix V (fai-) の MSS (Morphologically Selected Slot) へ移動するが)。主語位置に生成された CM cl (le) は、当該位置、あるいは embd.SPEC (T) 位置において対格を付与される。matrix AgrP が当該主語 cl に対して GC を構成する。(45b) も同様の論法により、文法的と予測される ((45a-b) は本稿設定されたすべての方言グループにおいて文法的と予測される)。(45c-e) の基本構造として (46) が想定される。

(46) の構造において, cl (les) と主語 NP (Jean) の embd. SPEC (T) 位置への移動は許容されない。つまり, cl (les) と NP (Jean) は基底生成された位置で格を付与されることになる。VGCh が, cl (les) と NP (Jean) のそれぞれに対格, 与格を付与する。cl (les) に対して GC となるのは matrix AgrP である。結果として, (45d) が文法的であり, (45c, e) が非文と予測されることになる (A' 方言以外)。A' 方言においては, VP に右方付加した位置に生成される NP 要素が大主語として機能するため, embd. VP が cl (les) の GC となる。当該方言では, (45d) も生成不能 (非文) である。明らかに, この予測は事実にあわない。(45c-e) において, cl (les, se) が共に V' に支配されている点に留意されたい。(45c-e) で観察される不都合は, ある一定の条件下で CM cl が NCM cl の挙動を示すと前提することにより打開可能であろう。ここで, 以下の (47) の仮説を設定する (この仮説は, 更に調査・検討した上で修正・廃棄すべきことは言うまでもない)。

(47) 仮説 (Tentative) :

With respect to two clitics (CM and NCM cl) which are both base-generated at V' ' daughter positions under the same VP, or one of which is generated at V' s or V' ' s sister position under the same VP and the other of which is generated at a left-adjoined position of the V, the moving pattern of the CM cl conforms itself with that of the other NCM cl.

仮説 (47) により, NCM cl (se) と同様に, CM cl (les) が embd. V (achet-) に左方付加することにより Case Filter の要請を満たすことが要求される (要素格付与)。VGCh と主語 NP (Jean) の隣接関係が形成されるため, VGCh の当該 NP に対する対格付与が可能になる (位置格付与)。結果として, (45c-e) の中で (45c) のみが文法的と予測されることになる (この予測は, 本稿で設定されたすべての方言グループにおいて妥当する)。

## 6. WH 要素移動

用例 (48) が示すように, CL と WH 要素は異なる挙動を示す (二重波線は主語要素を表す)。

- (48) a. à qui, as-tu fait téléphoner Jean t<sub>i</sub>? (P&H 1989: 82) 'to whom did you make Jean phone?'  
 b. \*je lui fais téléphoner Jean (P&H 1989: 100) 'I make Jean phone to him'

この相違は, WH 要素移動が束縛原理 (A) でなく束縛原理 (C) に従うと前提することにより説明される。一般的に, WH 移動における始発位置にある要素 (変項 (Variable)) は当該始発位置において格を付与されなければならない。変項 t<sub>i</sub> は embd. V' の sister 位置において与格を付与される (VGCh が主語 NP (Jean) に対格を付与する) <sup>26)</sup>。つまり, (48a) の NP と変項に対する格付与条件が満たされている ( (48b) については, (21a) と (42a) を参照されたい)。ここで, embd. V が二重他動詞 (Ditransitive) である場合の WH 要素移動について検討する。本稿の用例 (8) で検討したように, (50c) は基本的に非文と考えられる。 <sup>27)</sup>

- (49) a. Jean, à qui je ferai porter ce message à Pierre (P&H 1989: 91b)  
 'Jean, whom I'll make carry this message to Pierre'  
 b. \*Pierre, à qui je ferai porter ce message à Jean (P&H 1989: 91c)  
 'Pierre, to whom I'll make Jean carry this message'  
 c. \*à qui fais-tu porter un message à Pierre? (P&H 1989: 95b)  
 'to whom do you make Pierre carry a message?'  
 d. Pierre, à qui j'ai fait porter ce message par Jean (Ruwet 1972:257, 20a)  
 'Pierre, to whom I made Jean send this message'  
 e. à qui as-tu fait porter ce message par Jean? (Ruwet 1972:257, 20b)  
 'to whom did you make Jean send this message?'
- (50) a. (?) je ferai porter à Jean ce message à Pierre (Ruwet 1972:255, 15b)  
 b. \*je ferai porter ce message à Jean à Pierre (Ruwet 1972:255, 15c)

c. ??je ferai porter ce message à Pierre à Jean (Ruwet 1972:255, 15d)  
 'I will make Jean carry this message to Pierre'

前述のように、(50c)はNP (Jean, Pierre, ce message)の何れかに格が付与されないため非文と予測される(これまで本稿で前提されているように、*embd. AgrP*中の主語NPの*embd. SPEC (T)*位置への移動は許容されない)。(50c)が非文であるとすれば、上の(49a-c)の用例が非文と予測されることになる(変項に対する格付与条件、あるいはNPに対するCase Filterの適用)。少なくとも、ある方言グループにおいて(このグループがB方言の下位区分と想定し、B'グループと呼ぶ)、(50a)は基本的に文法的と判断される。(50a)の主語NP (Jean)は、それが基底生成された位置から*embd. SPEC (T)*位置へ移動していると考えられるであろう(不定法形態の動詞が生成される*embd. T*位置と当該SPEC (T)位置との相対関係を勘案すると、T位置にある不定法形態の動詞はPFでmatrix V (fai-)のMSS位置へ移動するすると考えなければならない(cf. Guasti (1991), Roberts (1991))。本稿では、VPに付加した位置に生成される主語clが*embd. SPEC (T)*位置へ移動可能と考えている。B'方言では、VPに付加した位置に生成される主語NPにも同様の移動が適用され、matrix V (fai-)が当該SPEC位置にあるNPに与格を付与すると考えられる。この前提により、(50a)と(50c)の相違が説明される。(49a-c)で観察されるように、(à NP)の形態である与格が共起する場合には主語要素のみがWH移動の適用を受ける。ここで、B'方言における主語NPと主語WH要素が同様の挙動をとり、それが基底生成された位置から*embd. SPEC (T)*位置へ(NP)移動可能と考えてみよう(B方言グループでは、主語NPの*embd. SPEC (T)*への移動は排除されるが、主語WH要素のそれは許容されるであろう)。この前提では、主語WH要素は変項に対する格付与条件により*embd. SPEC (T)*位置へ(NP)移動し、当該SPEC位置がWH移動の始発点ということになる。B(B')方言に対するこの論法は(49a)と(49b-c)をそれぞれ文法的、非文と予測する。それは、(49b-c)における主語NPが*embd. SPEC (T)*位置に移動しないため、主語NP要素に関するCase Filter、あるいは変項に対する格付与条件に抵触するためである((49a)では、Case Filterと変項に対する格付与条件の双方を満たす派生が可能である)。(49d-e)では、*embd. AgrP*中の主語位置は空である(当該位置に格が付与される必要がない)。この場合も、Case Filterと変項に対する格付与条件の双方を満たす派生が可能である。結果として、用例(49)に対して以下の方言別分布(51)が考えられる。また、上の論法が妥当するならば、B'方言において(52)の予測がなされる(未調査)。次いで、以下の(53)の用例を検討する。

(51) 方言別分布:	(49a)	(49b)	(49c)	(49d)	(49e)
SF	*	*	*	ok	ok
A (A') 方言	*	*	*	ok	ok
B (B') 方言	ok	*	*	ok	ok

(52) a. Pierre, à qui je ferai porter à Jean ce message  
 'Pierre, to whom I'll make Jean carry this message'  
 b. à qui fais-tu porter à Pierre un message ?  
 'to whom do you make Pierre carry a message?'

(53) a. Jean à qui je la fera parler (Milner 1982: 354)  
 'Jean, to whom I will make her speak'  
 b. ce tableau que je la ferai lire (Milner 1982: 354)  
 'this board which I will make her read'  
 c. \*le livre que j'ai fait lire Pierre (Milner 1982: 343)  
 d. le livre que j'ai fait lire à Jean  
 'the book which I made Pierre read'  
 e. \*Jean que j'ai fait écrire un livre (Milner 1982: 349)  
 'Jean who I made write a book'

主語 c1 が対格形 (1a) で実現されているため、(53a-b) は方言グループ A (A') に属するものである (VGCh が VP に左方付加した位置に生成される主語 c1 (1a) に対格を付与する場合には、(53a) はすべての方言グループで文法的と予測される)。当該方言において、embd. SPEC (T) 位置へ移動した CM c1 (1a) は matrix V (fai-) から対格を付与される。WH 要素 (à qui, que) は、embd. V (tv) からそれぞれ与格、対格を付与される。つまり、A (A') 方言の用例としての (53a-b) は共に文法的と予測される。(53c) において、主語 NP (Pierre) の embd. SPEC (T) 位置への移動は許容されない (embd. V の sister 位置に生成される WH 要素の当該 SPEC 位置への移動も不可)。つまり、NP (Pierre) と WH 要素 (que) の双方は VGCh から対格を付与されなければならない。明らかに、この格付与は不可能である。結果として、(53c) はすべての方言において非文と予測されることになる ((53d) はすべての方言で文法的である)。(53e) は、(53c) 同様非文と予測される。A (A') 方言用例としての (53c) はどうであろうか。仮に、当該方言における主語 WH 要素が主語 NP 要素と異なり embd. SPEC (T) 位置へ移動可能とすれば、(52c) は文法的と予測されることになる。筆者の知る限り、また Milner (1982) の判断にあるように、当該用例を文法的と判断する方言は存在しないと思われる。更なる調査が必要であることは言うまでもないが、A (A') 方言では WH 要素 (主語) の embd. SPEC (T) 位置への (NP) 移動が許容されないと考える。つまり、B (B') 方言においてのみ主語 WH 要素の embd. SPEC (T) 位置への移動が発動すると考える。結果として、(53) に対して以下の方言別分布 (54) が考えられる。

(54) 方言別分布:	(53a)	(53b)	(53c)	(53d)	(53e)
SF	ok	*	*	ok	*
A (A') 方言	ok	ok	*	ok	*
B (B') 方言	ok	*	*	ok	*

## 7. 結語

以上において、Laisser/faire 使役構文に関する初歩的な考察がなされた。当該使役構文は、AgrP を下位範疇化し、この embd. AgrP 中にある TP の embd. SPEC (Agr) 位置への移動が義務的に発動する Faire 構文とその移動が随意的に適用される Laisser 構文に分類された。本稿は、VP に付加した位置に生成される主語を想定し、接語 (CM c1) が束縛原理 (A) に従うと前提した考察であった。他の用例を吟味した上で、これまで本稿で設定された仮説群を更に修正・廃棄する必要があることは言うまでもない。<sup>28)</sup>

最後に、本稿の仮説群にとって問題となる用例とそれに対する 1 つの打開策を提示する。

- (55) a. j' ai fait manger sa soupe à Paul (Milner 1982: 152, 21a) 'I made Paul eat his soup'  
 b. je lui ai fait manger sa soupe 'I made him eat his soup'  
 c. je la lui ai fait manger 'I made him eat it'  
 d. je l' ai fait manger à Paul (Milner 1982: 152, 19) 'I made Paul eat it'
- (56) a. \*j' ai fait inviter ta sœur à Paul (P&H 1989: 73a) 'I made Paul invite your sister'  
 b. je lui ai fait inviter ta sœur (P&H 1989: 73b) 'I made him invite your sister'  
 c. je le lui ai fait inviter (P&H 1989: 109) 'I made him invite him'  
 d. \*je l' ai fait inviter à Paul (P&H 1989: 108) 'I made Paul invite him'
- (57) a. à qui as-tu fait envoyer un télégramme? (P&H 1989: 96b) 'whom did you make send a telegram?'  
 b. \*Pierre, à qui j' ai fait inviter ta sœur (P&H 1989: 24b)  
 'Pierre, whom I made invite your sister'

本稿の仮説群は、(55) と (56) の相違を予測不可能と思われる。(56) に対して (55) と同様の予測をすることになる。<sup>29)</sup> (57b) は (57a) と同様に文法的と予測される。(55-56) と (56a-b) の相違は、embd. V の意味特

性に関する相違を反映したものと考えられる。<sup>30)</sup>そこで、以下の仮説を設定する。

(58) 仮説：

- (a) With respect to a subject (NP and WH element) base-generated at a VP-adjoined position, a certain verb (inviter etc.) makes it obligatory for its subject to be base-generated at the left VP-adjoined position.
- (b) In B (and B') dialect, only a subject WH element base-generated at a right VP-adjoined position can NP-move to the embd. SPEC(T).

(55a) と異なり (56a) では、主語 NP (Paul) が VP に左方付加した位置に生成される。Case Filter の要請から、VGCh がこれらの NP (Paul, ta sœur) にそれぞれ対格、与格を付与する。この格付与は仮説 (4g) に違反する。(55d) と異なり、(56d) も同様に非文と予測される ((56b-c) は (55b-c) に対する論法により説明可能)。

(57a) の embd. V (envoyer) は (55) の embd. V と同様の挙動を示す。よって、NP と変項に対する格付与条件が満たされ、文法的と予測される。(57b) では、主語である WH 要素が VP に左方付加した位置に生成される。つまり、当該例は (56a) と同様に非文と予測される。B (B') 方言の用例として (57a-b) もそれぞれ文法的、非文と予測される。仮説 (58b) が発動しないと考えると、B (B') 方言の用例としての (57b) は文法的と予測されることになる (この予測に関しては、更なる調査が必要)。つまり、B (B') 方言を除くすべての方言において (55-57) が同様の判断を受けることになる。

(59) 方言別分布：	(55a)	(55b)	(55c)	(55d)	(56a)	(56b)	(56c)	(56d)	(57a)	(57b)
B (B') 方言	ok	ok	*	*	*	ok	*	*	ok	*(ok)
その他	ok	ok	ok	ok	*	ok	ok	*	ok	*

註

- (\*) 本稿は日本ロマンス語学会第29回大会 (1991年5月17日、於岩手大学人文社会科学部) における口頭発表内容を修正・拡張したものである。上の発表の一部は、石岡 (1992) で報告されている。
- (1) 前者の例として、Reed (1990a, 1990b, 1992), Ouhalla (1989, 1990) 等がある。後者の例としては、Pearce (1990), Pijnenburg & Hulk (1989) 等がある。Guasti (1991) は、Faire が IP と異なる新たな範疇である InfinitiveP (InfP) を下位範疇化すると考える。
- (2) 本稿では、CP に対して (i) の構造が想定される。  
 (i) [<sub>CP</sub> [<sub>AgP</sub> [<sub>NegP</sub> [<sub>TP</sub> [<sub>AspP</sub> [<sub>VP</sub> ]]]]]]]  
 NegP と AspP は、それぞれ Neg (non) と Aspect 要素 (Avoir, Etre) の最大投射を表す (詳細は、Ouhalla (1991) を参照されたい)。また、[-Finite] CP (AgrP) において V の T への移動により不定法形態が生成され、この V の T への移動は義務的に発動すると前提される。matrix V (laiss-) が AgrP を下位範疇化すること、当該 V に下位範疇化される範疇内部に Neg 要素と Asp 要素が生起しないという事実、つまり、当該 V の下位範疇化される範疇の欠陥性が関連すると思われる。Reed (1990a, 1990b, 1992) は、Faire が Neg, あるいは Asp 要素を含む Canadian French の用例を挙げ、当該 V (fai-) が CP を下位範疇化すると考えて論を展開する (詳細は、当該論文を参照されたい)。
- (3) 詳細な検討は割愛するが、非 Pro-Drop 言語に属するロマンス語 (例えば、フランス語) の [-Finite] CP (AgrP) 中の AgrP は、語彙的要素が付加移動した場合でもその sister である TP を L 標示することはないと考えられる。また、Relativized Minimality Barrier に関する定義体系に関しては、Rizzi (1990), Cinque (1990), Ouhalla (1991) 等を参照されたい。
- (4) 同様のことは、Faire 使役構文と知覚構文にも妥当する。つまり、Laisser/Faire と知覚動詞 (voire 等) に下位範疇化 (統率) される AgrP の主要部に対する L 標示機能の活性化は、当該使役 (知覚) 動詞の語彙的特徴と前提される。
- (5) Laisser は、後述する \_\_\_\_\_ Acc (Dat) の Case Array を持つと考える。
- (6) (3) 中の t<sub>TP</sub> は、最大範疇 TP の移動による痕跡を表す。Laisser 構文と知覚構文の場合と異なり、Faire 使役構文での TP の embd. SPEC (Agr) 位置への移動は義務的である。
- (7) (4a-d) は、Goodall (1987) による。(4f-g) は、主語 NP が VP に右方付加、あるいは左方付加した



位置に生成されると想定した場合等に必要となる前提である。

- (8) 以下において、cl には二重下線を付す。
- (9) [+Finite] GP 中の主語が VP に右方付加した位置に生成される場合には問題が惹起しない。主語 NP が VP に左方付加した位置に生成されると考えた場合には、当該 VP の下位に生成される cl に対する GC と指定されるのは matrix TP となる。この不都合は、V に関する形態論的編入 (Morphological Incorporation) が完了した時点で cl 移動 (CL) が適用されると前提することにより打開される。
- (10) 主語 NP (Marie) が embd.VP に左方付加した位置に生成される場合には適切な出力が得られない。embd.VP が cl (le) に対する GC となる。CPC の適用により、当該 cl (le) が移動によって痕跡となった tv に付加移動することになる。
- (11) 仮説 (18) は以下のフランス語用例を説明すると考えられる (文法の一般原理から仮説 (18) を導出可能であるか等の問題を更に検討する必要がある)。
- (i) \*Jean a été travailler beaucoup (Guasti 1991:note 9)  
'Jean has been made to work a lot'
- (ii) \*la maison a été faite construire (à Casimiro) (Pearce 1990:77)  
\*la maison a été faite construire (par Casimiro) (Zubizarreta 1986: 20a)  
'the house was made to be built by Casimiro'
- 一方、(i-ii) に対応するイタリア語例 (iii-iv) と (v) は文法的である。つまり、仮説 (18) が妥当するならば、イタリア語の Fare 使役構文において随伴 (Pied-Piping) が発動しないことになる。
- (iii) Gianni è stato fatto lavorare molto (Guasti 1991:6)  
'Gianni has been made to work a lot'
- (iv) la macchina è stata fatta riparare a/da Gianni (同上:11)  
'tha car has been made to be repaired by Gianni'
- (v) Giovanni fu fatto riparare la macchina (Burzio 1986:232)  
'Giovanni was made to repair the car'
- (12) Goodall (1987:101) は、(22a) が (22b) よりも好まれ、(22a-b) が (21a-b) よりも better だと指摘する。本稿の仮説群は (23) を相違を適切に説明する (派生過程の詳細は割愛する)。
- (13) 仮説 (25) により、(22) の cl (lui) の着地点として embd.Agr と embd.T が考えられる。当該 cl が embd.Agr 位置へ付加移動した場合には、当該 cl の痕跡はその先行詞によって X<sup>0</sup> 束縛されない。つまり、この場合の CL は排除される。cl (lui) が embd.T 位置へ付加移動した場合には問題がない。
- (14) 代名動詞、Middle、そして Neuter 構文中の NCM cl は V に左方付加した位置に基底生成されると考えられる。embd.V へ付加移動 (基底生成) することによる格付与を要素格付与と呼ぶ。基底生成された位置 (あるいは Case Filter の要請により移動した位置) にある要素への格付与を位置格付与と呼ぶ。
- (15) NCM cl が embd.V 位置へ左方付加することにより Case Filter の要請が満たされる点に関しては、Baker (1988) を参照されたい。tv (embd.V) が対格を要素格付与した場合でも、matrix V (fai-) の統率によって形成される VGCh が対格を位置格付与すると考える必要がある。つまり、「位置格付与」と「要素格付与」は Case Filter に関しては同様の機能を果たすものであるが、それぞれが別種概念と前提しなければならない。但し、対格を位置格付与可能な動詞がその格付与機能を失った場合には、当該動詞の要素格付与機能も失われると考えられる。
- (16) あるいは、NCM cl (te) が基底生成された位置から空 (Φ) となっている主語位置へ移動するとも考えられる (この NP 移動は随伴に関する規制 (18) に抵触しない)。つまり、NCM cl が主語位置に基底生成される場合 (本稿の (30e)) と当該主語位置に NP 移動した場合に限り VGCh による格付与が可能となり、当該 NCM cl が CM cl として振る舞うと考えることも可能であろう (詳細は、稿を改める)。
- (17) 以下で設定される方言グループはフランス語の一部である点に留意されたい。また、B 方言グループは通例 Double Dative 方言と呼ばれる。
- (18) この場合の対格付与は、単一の VP 構造内部にある複数要素に対する同時対格を付与を排除する規制によっても許容されない (cf. Moore 1991:183)。Relativized Minimality の観点から、B 方言での matrix V (fai-) の主語 cl に対する与格付与は、embd.SPEC (T) 位置へ移動した主語 cl に対して発動するのであろうか (この与格付与が matrix V (fai-) による統率をその条件とする限り)。あるいは、主語 cl が基底生成された位置で matrix V (fai-) から与格を付与されるのであろうか。あるいは、この2つ

- の可能性が方言ごとにパラメーター化されているのであろうか（詳細は、稿を改める）。方言ごとにパラメーター化される場合、以下の (i) が文法的と判断される方言が存在することになる (cf. (37b))。
- (i) elle me(dat) fera lui téléphoner 'she will make me phone to her'
- (19) この embd.SPEC (T) 位置への主語 cl の NP 移動は当該 cl の生成位置に関係なく発動するであろう。
- (20) 本稿では、(37a-b) に観察される la lui, me lui 等の cl 連続の相対的位置関係が問われない。
- (21) フランス語では、CL が痕跡でない機能範疇 X<sup>0</sup> への付加移動によって発動すると考えても同様であろう。
- (22) 一般的に、与格付与に対しては隣接要件が関与しない。
- (23) この場合、VP に左方付加した位置に生成される主語 cl (me) の embd.SPEC (T) 位置への移動を誘発する要因は存在しない。よって、当該主語 cl は基底生成された位置にとどまる。
- (24) 主語 cl (le) が VP に左方付加した位置に生成される場合には適切な出力が得られない。それは、cl (lui) に対して GC を形成する要素が embd.VP であるためである (VP に左方付加した位置にある当該 cl (le) の痕跡が大主語 (SUBJECT) となる)。
- (25) 本稿では、cl (se, les) の相対的位置関係は問われない。
- (26) 本稿では、WH 要素における Subjacency が関与する事例を取り扱われない。
- (27) 以下の (i) で示すように、P&H (1989) は (49c) に対応する用例が周辺的であるが許容されるという。  
(i) ?je ferai porter ce message à Pierre à Jean (P&H 1989: 91a)  
'I'll make Jean carry this message to Pierre'
- 一方、Ruwet (1972) は (49c) が非文である (49b) よりも少し meilleur であるとする。本稿においては、Ruwet (1972) の判断に従う (P&H の判断を許容する方言の存在の有無に関しては稿を改める)。
- (28) 前置詞接語 (Prepositional Clitics, EN, Y) に関する論考は稿を改める。
- (29) (55) は、本稿の仮説群によって説明可能である。
- (30) P&H (1989) は Milner (1982) の用例を引用している。Milner (1982) は、V (inviter) と同様の挙動を示すものとして V (décorer, détruire) を挙げる。

#### 参考文献

- Aoun, J. (1985). A Grammar of Anaphora. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Authier, J. -M. and L. Reed (1991). "Ergative Predicates and Dative Cliticization in French Causatives." Linguistic Inquiry 22.1, 197-205.
- Burzio, L. (1986). Italian Syntax: a Government-Binding Approach. Reidel, Dordrecht.
- Bailard, J. (1982). "The Interaction of Semantic and Syntactic Functions and French Clitic Case Marking in Causative Sentences." Syntax and Semantics 15.
- Baker, M. C. (1988). Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing. University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Cinque, G. (1990). Types of A' Dependencies. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Chomsky, N. (1986). Barriers. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Gibson, J. and E. Raposo (1986). "Clause Union, the Stratal Uniqueness Law and the Chômeur Relation" Natural Language and Linguistic Theory 4, 295-331.
- Goodall, G. (1985). "Parallel Structures in Syntax." The Linguistic Review 5, 173-184.
- Goodall, G. (1987). "Case, Clitics, and Lexical NP's in Romance Causatives." Neidle, C. and Rafael A. Nuñez Cerdeño (eds.) Studies in Romance Languages. Foris, Dordrecht.
- Gross, M. (1968). Grammaire Transformationnelle du Français: Syntaxe du Verbe. Larousse, Paris.
- Guasti, M. T. (1991). "Incorporation, Excorporation and Lexical Properties of Causative Heads." The Linguistic Review 8, 209-232.
- Hyman, L. and K. Zimmer (1976). "Embedded Topic in French." Ch. Li and K. Zimmer (eds.) Subject and Topic. Academic Press, New York.
- 石岡精三 (1992). 「フランス語 Faire 使役構文における CM clitics (Case-Marked Clitics) と NCM clitics (Non Case-Marked clitics) の相違について」長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』6号。
- Kayne, R. (1975). French Syntax: the Transformational Cycle. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Kayne, R. (1989). "Null Subjects and Clitic Climbing." O. Jaeggli and K. J. Safir (eds.) The Null

Subject Parameter. Kluwer, Dordrecht.

- Kayne, R. (1990). "Romance Clitics and PRO." NELS 20.
- Kayne, R. (1991). "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO." Linguistic Inquiry 22, 647-686.
- Legendre, G. (1990). "French Causatives: Another look at faire par." K. Dziwirek, P. Farrell, and E. Mejias-Bikandi (eds.) Grammatical Relations: A Cross-Theoretical Perspective. The Center for the Study of Language and Information Stanford University.
- Milner, J.C. (1982) Ordres et Raisons de Langue. Éditions du Seuil, Paris.
- Moore, J. (1991). Reduced Constructions in Spanish. Ph.D. dissertation, University of California.
- Ouhalla, J. (1989). "Clitic Movement and the ECP." Lingua 79, 165-215.
- Ouhalla, J. (1991). Functional Categories and Parametric Variation. Routledge, London and New York.
- Pearce, E. (1990). Parameters in Old French Syntax: Infinitival Complements. Kluwer, Dordrecht.
- Pijnenburg, H. and A. Hulk (1989). "Datives in French Causatives." Probus 1.3, 259-282.
- Quicoli, A. C. (1980). "Clitic Movement in French Causatives." Linguistic Analysis 6.2, 131-185.
- Quicoli, A. C. (1984). "Remarks on French Clitic Systems." Linguistic Analysis 14.1, 55-96.
- Reed, L. (1990a). "Biclausality, Barriers and the French Causative Construction." Cahiers Linguistiques d'Ottawa 18, 79-93.
- Reed, L. (1990b). "Adjunctions, X<sup>0</sup> Movement, and Verbal Government Chains in French Causatives." MIT Working Papers in Linguistics 12, 161-176.
- Reed, L. (1991). "The Thematic and Syntactic Structure of French Causatives." Probus 3.3, 317-360.
- Reed, L. (1992). "Remarks on Word Order in Causative Constructions." Linguistic Inquiry 23, 164-172.
- Rizzi, L. (1990). Relativized Minimality. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Roberts, I. (1991). "Excorporation and Minimality." Linguistic Inquiry 22.1, 209-218.
- Roegiest, E. (1991). "La Redondance Fonctionnelle dans la Construction Factitive." Kremer, Dieter (ed) Actes Du XVIII<sup>e</sup> Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes. Tome II. Niemeyer, Tübingen.
- Rouveret, A. and J.-R. Vergnaud (1980). "Specifying Reference to the Subject: French Causative and Conditions on Representations." Linguistic Inquiry 11, 97-202.
- Ruwet, N. (1972). Théorie Syntaxique et Syntaxe du Français. Éditions du Seuil, Paris.
- Sportiche, D. (1988). "A Theory of Floating Quantifier and Its Corollaries for Constituent Structure." Linguistic Inquiry 19, 33-60.
- Tasmowski, I. (1984). "\*LUI FAIRE TÉLÉPHONER QUELQU'UN D'AUTRE: UNE STRATÉGIE?" Lingvisticae Investigationes 8.2, 403-427.
- Wehrli, E. (1986). "On Some Properties of French Clitic SE." Syntax and Semantics 19, 263-283.
- Zubizarreta, M. (1985). "The Relation between Morphophonology and Morpho-syntax: the Case of Romance Causatives." Linguistic Inquiry 16, 247-289.
- Zubizarreta, M. (1986). "Le Statut Morpho-Syntaxique des Verbes Causatives dans les Langues Romanes." M. Ronat & D. Couquaux (eds.) La Grammaire Modulaire, Les Éditions de Minuit, Paris.